

『狐物語』の背景—環境と文学の視点から—<sup>1)</sup>

原野 昇

はじめに

人間の成育と活動は環境と切り離すことができない。「環境破壊」とか「環境汚染」と言われる場合、環境＝自然環境と考えられているようであるが、環境には自然環境のみならず、社会（文化）環境、思想（文化）環境もある。自然環境には言うまでもなく、地形、地勢、動植物、気候、気象条件などがある。社会（文化）環境としては、その人間の属する集団の政治制度、法律制度、経済制度、家族制度などがある。思想（文化）環境というのは、その集団の世界観、価値観、死生観や、宗教、道徳、エトスなどのことを言う。後二者をまとめて文化環境として、環境を自然環境と文化環境に分けて考えられることもある。しかし、社会（文化）環境と思想（文化）環境とが密接な関係にあることは言うまでもないが、自然環境と社会（文化）環境、自然環境と思想（文化）環境にもまた同様に密接な関係がある。すなわち自然環境と文化環境とを全く異質なものとして切り離して考えることはできない。そもそも人間は動物の一種族であるヒト類として、自然（の一部）そのものにほかならないからである。

環境のことをフランス語で *environnement*（周囲）、あるいは *milieu*（～のまっただ中）と言う。すなわち環境とは、「取り囲まれているもの」「何かのまっただ中にあるもの」が前提され、そのものに視点を置いた言い方である。その場合焦点が個人に当てられている場合もあれば、集団に当てられている場合もある。そしてその個人または集団には、ある時代、ある地域が限定される。したがって環境と言えはすなわち、「ある時代、ある地域の、ある個人またはある集団にとっての環境」ということになる。

人間（ある個人またはある集団）は環境の中にあって生育・活動するに際し、環境に順応するか環境を改変していく。人間の歴史は種々の環境への順応の仕方の歴史であり、環境改変の歴史であると言える。

一方文学は人間の諸活動のうち、表象活動の一つである。表象活動のことをフランス語では *représentation* と言う。*représenter* することであるが、その元にある *présenter* とは、*présent*（目の前にある）たらしめること、現前させることである。したがって *représenter* は今日の前にない、空間的・時間的に *absent* なものを再現する行為である。その場合再現される対象は、人間の五感を通して体験され認知・把握された世界のみでなく、想像力によりイメージされた空想の世界も入る。実は人間の言語活動そのものが表象活動の一つであるので、文学は言語活動の一形態とすることができる。この場合、絵画が絵の具を素材とした表象活動であるのとは全く異なり、文学は決して言語を素材とした表象活動ではない。言語は上で見たように人間の活動の一つであるので、絵の具のような存在とは全く異なる。その意味では「ゲンゴロ」という動詞を考えなければならない。すなわち文学は「ゲンゴロ」という人間の活動の一形態である。したがって「文学は *représentation verbale* である」という場合、それは「言語表象活動」であっ

で、決して「言語による表象活動」ではない。

文学が通常の言語コミュニケーション行為と異なるところは、言語行為を通して一つのまとまり、一全体（作品）を構築する点にある。その一全体（作品）は俳句のように短いものから長編小説のような長いものまで千差万別である。文学は言語活動（représentation）を通して構築されたその一全体（作品）をもってさらに représenter する行為なので、二重の représentation である。この点が他の表象活動、芸術創作活動と文学とを区別する点である。「作品」という語を避けて「テキスト texte」と呼ばれることがあるのも、文学におけるこのような二重の表象性と無関係ではなからう。作品を経（縦糸）と緯（横糸）とが織りあげられたもの texture ととらえるわけである。「作品」（œuvre<opera 作られたもの）という語には「作り手（=作者）」が色濃く含意されるのに対し、「テキスト」には織りあげた行為者よりも、経と緯とが絡み合い、組み合わされている状態の方に、より重点が置かれている表現と言えよう。

文学を含めあらゆる表象行為（芸術）は行為主体による他者（鑑賞者）への働きかけである。すなわち行為者は他者の心に対して何らかの印象を植え付け（英語 impress）、相手の心を動かし、感動を与えようとする。その際には、相手により強烈な印象を植え付け、より強い感動を与えるべく、より適切な素材とより効果的な表出方法（技法）が模索される。

人間が自然、社会、思想的環境に囲まれて成育し活動する際、その環境が成育・活動にとって好都合であり、環境に何らの違和感も抱かない場合もあるが、逆に何らかの違和感を抱き、環境との間に対立、抗争、闘争が生じる場合も少なくない。

文学作品の構築者が鑑賞者により強烈な印象を植え付ける素材として目を付けるのは、後者の場合、すなわちある個人または集団が自らを取り巻く自然環境、社会環境、思想環境と対立し抗争する場合である。このような観点から、フランス中世文学を見直してみたい。例として『狐物語』第9枝篇を取り上げる。分析を始める前に第9枝篇の梗概をあげておく。

物持ちの農夫リエタールは8頭の牛を犁に繋ぎ朝早くから畑を耕している。ところが土地が固く難儀をしており、1頭の牛ルージェルの働きが悪いのに業を煮やし、口汚く罵る。「お前なんか熊にでもくれてやる」と。

茂みの陰でこれ聞いた熊のプランは「さあ約束どおりルージェルをいただく」と言う。リエタールは懇願し、明日までの猶予をようやく得る。

自分の軽率な罵りの言葉を嘆いているリエタールの所にルナルが現れ、雄鶏のプランシャルをお礼にしてくれるならという条件で智恵を授ける。それは明日プランがルージェルをもらいに来たら、自分が犬の吠え声や人の叫び声の真似をするから、プランがあれば何かと尋ねたら、狩りに来た伯爵様の一行だと応えよ、プランは隠れさせてくれと頼むに違いないので、畑の畝に隠してやり土をかけ、持ってきた斧で殴り殺し、夜中に家まで運ぶといい、というものであった。リエタールは言われたとおり首尾よく事を選び、熊プランの肉を塩づけにした。

翌朝ルナルが約束の鶏を要求すると、リエタールは妻の入れ智恵で納屋に隠しておいた番犬を放す。ルナルは犬に噛まれ、傷だらけ、血まみれになってわが家モーベルチェイに逃げ

帰る。

妻のエルムリーヌに傷の手当をしてもらい、リエタルに仕返しをするには、牛を犁に繋ぐ皮ひもを盗めばいいという智恵を妻から授かる。

傷が癒えたルナールは隙を見て皮ひもを盗む。ルナールに盗まれたと直感したりエタルが、皮ひもがなくては仕事にならないと嘆いているのをロバのティメールが聞き、大麦の約束と引き替えにルナールの家の前で死んだふりをする。死んだロバを見つけたルナールの妻エルムリーヌはロバを家の中に引き入れようと思い、リエタルの皮ひもで自分とロバをしっかりと結ぶ。死んだふりをしていたティメールは起き上がり、エルムリーヌを引きずってリエタルの家まで帰って来る。リエタルは狐のエルムリーヌめがけて剣を振り下ろすが、はずれてティメールの尻尾を切り落としてしまう。

ティメールの尻尾をつけたまま帰って来た妻のエルムリーヌを見たルナールはリエタルへの仕返しを考える。ルナールは、熊の肉を家に隠していることを伯爵様に告げ口するぞ、とリエタルを脅す。これを聞いたリエタルは、密猟がばれたら何もかもおしまいなので、ルナールの家来になることを約束し、自分の番犬もルナールの望みどおり殺し、雄鶏、雌鶏をルナールの好きなだけ差し出し、ルナールは思う存分ご馳走になる。

## 1. 自然環境

ご覧のようにこの枝篇は、だましたつもりの方がだまされる、しかも口約束を信じて、というテーマが次から次へと繰り返されている。その発端となったのは農夫リエタルが畑を耕していて、なかなか進まない彼の牛ルージュエルを口汚く罵ったところにある。リエタルは朝早くから畑に出かける働き者で、近在一物持ちであり、畑を耕すのに 8 頭もの牛を犁に繋いでいる。現在のフランスの国土は山岳地帯は約 2 割にすぎず、約 8 割が平地であり、肥沃な土地が広がっている。しかし中世においてはその平地も多くの部分が森に覆われていたのである。その森は平地林であり、森は海、村は島と表される。そこで森を少しずつ拓いていき、耕作地を増やしていった。その際、牛に犁を牽かせるための繁駕法の改良（12 世紀）は耕作地の拡大に大いに寄与したとされる。人力に比べ、牛 1 頭繋ぐだけでもその耕作力は格段に増すが、2 頭、4 頭と繋げばその威力は人力とは比べものにならない。リエタルは 8 頭の牛を繋いでいる。それでもなかなか思うように仕事が捗らず、そのうちの 1 頭ルージュエルは疲労困憊の態である。この枝篇の作者は Croix-en-Brie の一司祭となっているので、この枝篇の舞台もフランス中部の Brie 地方と考えてよからう。Paule Constant という歴史学者は *La Vie paysanne de la Brie au XIIe siècle d'après le Roman de Renart* という論文<sup>2)</sup>の中で、『狐物語』第 9 枝篇が当時のこの地方の農民の姿を忠実に描いていると見ている。そしてそこに描かれているいくつかの点は今もこの地方の農民の姿に通じるところが多々あると指摘し、その一つの例として、この固い土地、耕作の困難さをあげている。

appeler “terres fortes” ce que Liétard nommait “les forts lieux” ?<sup>3)</sup>

人間の自然環境との戦いがこのように文学のテーマとして取り上げられ、『狐物語』第9枝篇においては物語の発端として冒頭に置かれているのである。

## 2. 社会環境

窮地に陥り不運を嘆いているところに、いい知恵を授けてやろうという者が現れ、そこで何らかのお礼（お返し）を約束し、それと引き換えに知恵を授かり、その者は窮地を脱する。しかし危機が去ってしまえば約束を果たすのが惜しくなり、約束したことをまた嘆く、といったテーマが延々と続いて、いつ果てるとも分からない時にあって、この流れを完全に断ち切って話を終結へと導いたのは密猟のテーマであった。密猟が見つければ「即刻死刑」であり、「いくら身代金を積んでも無駄」であり、「一族の者も全員追放される」のである。リエタールの場合は現行犯ではなくて、熊を殺してその肉を家に隠し持っていることを告げ口するぞと脅されている。ここでも当時の農民が置かれていた状況がリアルに描かれている。

ここには、騎士階級にとつての狩猟の重要性と、一般農民にとつても蛋白質としての食肉確保の問題という背景がある。すなわち森に禁漁区が設定され、その区域内では社会のある階層、ある限られた者にもみ狩猟が許されており、それ以外の者には厳しく禁じられている。密猟者本人の「即刻絞首刑」と「一族の追放」という極端な厳しさは、いくら禁止しても効き目がなく、密猟が後を絶たなかったということの、裏返しの証明であろう。物持ちリエタールの場合には少し違っているかも知れないが、一般的には農民にとつて狩猟は、いくら禁止されても生きていくために背に腹は代えられない、といった切実な問題だということであろう。

騎士階級にとつての狩猟の重要性には種々の側面があった。まず第一に、狩猟は馬上槍試合などと並んで、戦いに備えての肉体鍛錬の機会でもあった。社会が落ち着き、実際の戦いがなくなると、その重要性はますます増していった。次に自分たちの食肉確保という実利的側面もあった。この枝篇でも、ルナールの説明は「伯爵（おそらくシャンパーニュ伯ティボー3世、1179-1201）の一行がペンテコステ（聖霊降臨祭、復活祭の50日後）の宴会の準備のために森にやって来た」、「特に今年は20人もの騎士を叙任するので特別多くの肉が必要だ」というものであった。領主は騎士の叙任をはじめ、結婚、和睦、その他様々な機会に諸侯を招き、盛大な宴会を催さなければならなかった。臣下に大盤振る舞いをする、すなわち *largesse* を示すことは、主君たる者の資格の重要な要件であった。その大宴会において多くの騎士に食事を供するため大量の肉を準備しなければならなかった。

騎士階級にとつて狩猟はこのような実利的側面を持ちつつも、自らの特権階級誇示のための重要な活動であり、したがって一般農民の狩猟のあり方は場所も方法も区別する必要があった。狩猟方法としては、槍や弓矢を持って馬に乗った騎士が多人数で一団を編成し、勢子や犬と共に森じゅうを駆けめぐり、鹿などの獲物を追い出し、追いつめて仕止めるもので、「走駆狩猟（シャッス・ア・クール）」と呼ばれる。（この伝統的狩猟法は現代まで一部の人々によ

って保存・伝承されている。)騎士たちのこの走駆狩猟のために設定された区域では一般の者の狩猟が厳しく禁止されている。これに対し農民は種々の罾を仕掛けてうさぎ、りす、狐、猪などを捕ることが多かった。

このような密猟という社会環境における農民の緊張状態が文学の一テーマとして取り上げられ、ここ『狐物語』第9枝篇では物語を終結する重要なテーマとなっている。それだけ一般の人々にとって関心の高いテーマだったと言えるだろう。

### 3.思想環境

フランス中世文学のうち聖人伝に次いで現れた武勲詩は、ある英雄の高貴な行為を讃えることによって、結果的にその集団の社会的地位を高め、同時にその集団に率いられている一般民衆を含むより広い共同体(フランス)構成員相互間の結びつきをもより緊密にする。その共同体はキリスト教を共通の価値規範として共有している。当然のことながらその統一性の保持は容易なものではなく、常に破壊、崩壊の危機にさらされている。『ロランの歌』を例にとれば、キリスト教世界破壊の危険性のある異教徒軍とシャルルマーニュ軍との対立であり、共同体内部にあっては、ガヌロンの裏切りなどに見られるように、個人の名誉欲、権力欲、嫉妬心など種々の欲望の対立による共同体崩壊の危機である。このような共同体にとって危急存亡の危機の中における英雄的行為を歌い上げるのが武勲詩である。

次に現れたロマン(物語)の背景には、実際の戦いが少なくなった宮廷にあって、先述のように種々の機会をとらえての宮廷訪問が行われ、その際の間接触における礼儀作法 *courtoisie* の発展がある。客人のもてなしに際しての配慮、他人に対する気配りから男女間における「精美の愛 *fin'amor*」という理想が生まれてきた。クレチャン・ド・トロワの諸作品のテーマとなっているものである。

このような文学状況の中にあつて、ファブリオや『狐物語』のような笑いを追求する文学が出てきたということ自体、思想的環境に対する一つの挑戦、一つの戦いと見ることができる。ファブリオにはそれまでの文学には登場しなかった人々、すなわち農民や種々の職業に携わる職人、またその妻たちが登場するし、『狐物語』では狐をはじめとする動物を描きつつ、それに託して実際には人間社会が描かれている枝篇も多い。一部の選ばれた特権階級の人々(騎士、貴族)に対する一般民衆(農民、町人)、人間の理想的な姿に対する現実生活、人間生活の表・ハレの部分に対する裏・ケの部分、人間の高貴さ・偉大さ・善性に対する愚かしさ・狡猾さ・悪性が前面に押し出され、それを堂々と表現する行為そのものに、当時の思想的環境に対する挑戦を読みとることができるのである。

以上、『狐物語』第9枝篇をとおして、当時の人々を取り囲んでいた自然環境、社会環境、思想環境がどのようなものであったのか、それらの環境のうち人々の生活にとって特に厳しく対立するものととらえられていたものの一端をかいま見ることができたのではなからうか。

## 注

<sup>1)</sup> 本稿は1997年11月8日に名古屋大学で開催された「山岳文化と環境」研究会で行った *causerie* に加筆して修正したものである。

<sup>2)</sup> *Bulletin de la Société archéologique et historique de Chelles*, N°13, juin 1949, pp.5-9 ; *Ibid.*, N°14, août 1949, pp.2-7.

<sup>3)</sup> さらに次のように続けている。「Combien de familles “Liétard” demeurent encore dans nos villages, et combien de paysannes se rendent encore “à la foire de mai”, celle de La Ferté Gaucher ? celle de Coulommiers ? où Liétard devait acheter son bœuf, et qui reste toujours la grande réjouissance de printemps. Le langage même se retrouve ; on aime au village appuyer ses dires sur quelques proverbes sentencieux qui sont les résumés de la sagesse ancestrale de bouche en bouche.

On dit qu'un échaudé de l'eau craint

Tant gratte chèvre que mal gît

Il ne sait qu'à l'œil lui pend»

*Ibid.*, N°14, pp.6-7.